

モネ連作の情景

上野の森美術館 23. 10. 20～24. 01. 28 大阪中之島美術館 24. 02. 10～05. 06

印象派を代表する画家「クロード・モネ」は、柔らかい色遣いと温かい光の表現を得意とし、刻々と移り行く自然の表情を捉える作品を手がけている。

なかでも「積みわら」や「睡蓮」に代表される「連作」には移ろいゆく景色とその表情を描きとめようとした画伯の探求心が色濃く反映されている。

本展は、パリで「第一回象派展」が開催され150周年を迎える節目年であり、「モネの連作」をテーマに初期の人物画から晩年期の「睡蓮シリーズ」まで、生涯を作品で辿る「約60点」作品より半数以上が展示され豪華である。

「クロード・モネ」(1840～1926)が、田園の《積みわら・雪の効果》を制作は1891年で、季節や天候や時間帯などによって異なる表情の魅力に気が付いたことで、「風景画の連作」は画伯の発明であるとされている。

画伯は、毎年ロンドンに滞在し、テムズ河畔のホテルのバルコニーにカンヴァスを構えて、様々な色味で光と水が現出される多彩な表情を描いている。

展示作品《ウォータールー橋》は、大気のモヤモヤとした状態が描かれて、橋の構造が曖昧となっていくのは、この発想が昼と夜の風景を同じ版で刷った作品もあることから「浮世絵版画」の影響があったものとされている。



クロード・モネ 《ジヴェルニーの積みわら》1884 油彩/カンヴァス

画伯は、戸外制作に開眼して自然のなかに見られるモチーフの一瞬の表情、風の動き、時の移ろいに着目するようになり、同じ場所やテーマを異なる天候・時間・季節のもとで通して描く「連作」という表現手法で描いた。

クロード・モネ 《睡蓮の池》1918年 油彩/カンヴァス

移ろいゆく景色とその表情を描きとめようとした「連作」の代表作で、柔らかい色遣いと暖かい光の表現で、刻々と移りゆく自然の表情を捉えている。